

クロニカ(1) - ブラジル文学における独自のジャンル CRÔNICA, UM GÊNERO *SUI GENERIS* DA LITERATURA BRASILEIRA

エレナ・トイダ
Helena H. Toida

O presente trabalho tem por objetivo abordar um gênero literário, a crônica, tida como *sui generis* da literatura brasileira, mostrando seu conceito fundamental e breve evolução na história literária.

No conceito geral, a crônica vem a ser apenas uma narrativa que tem como tema os acontecimentos da vida mundana, do cotidiano, principalmente da vida urbana, que passariam até despercebidos se não fosse a percepção acurada do cronista, publicada em jornais e revistas, sendo sua função primordial, a de divertir os leitores através da técnica narrativa que, muitas vezes, se utiliza do humor e da ironia.

No caso da crônica brasileira, os pequenos relatos da vida se tornam, depois de alguns anos, em uma coletânea, após uma seleção do próprio cronista (geralmente), para adquirir uma posição privilegiada dentro da literatura brasileira e, o que é mais relevante, ganhando caráter universal, inerente às obras literárias.

Apresentaremos uma breve pesquisa sobre o termo propriamente dito – crônica – e de que forma ela foi ganhando uma posição digna de ser considerada um gênero literário no Brasil, fato este que ocorreu como consequência da procura do abasileiramento, não só da língua como também da literatura.

はじめに

文学作品が文学作品たる所以は、普遍的な感動を数々の読者に与えるからであろう。どんな言語で書かれていても、それは必ず相応の評価を得るのである。ただ、私が常々考えてきたことは、何も長編小説でなくともよいのではということだ。また重々しい技法で描写されたものだけが文学作品として後世にまで残されるに値するとは思われないのである。

一般的にいて文学は神聖視される傾向がある。そのテーマとなるものは、純文学にふさわしいものでなければならない。しかし、はたしてそれは正論なのか、疑問の生じるところだ。なぜ長編小説がしばしば短編や短い詩よりも価値があるとみなされるのだろうか。

本稿であつかうクロニカ (crônica) とは、そうした文学神聖視に反するジャンルであると思われる。クロニカはブラジル文学独特とさえ位置付けられるのだが、それは強いて言えば、ユーモアと風刺と抒情性に彩られた、社会評論的エッセイとでもいえるだろうか。以下、そのクロニカについて、まずどのようなものなのか定義を行い、次にそれがブラジル文学史においてどのように現れ、どのように時代とともに変遷し、そしてそんな経過を経て現在の位置に辿り着いたかの考察を試みたい。

基本的にクロニカは散文の一ジャンルであり、政治や時評、日常生活、特に都市に住む人々の悲喜こもごもの出来事をテーマとする、大体1000語以下の作品の事で、新聞や雑誌のコラムや文芸欄に掲載される作品である。その役割は、読者を楽しませることが最初に挙げられるであろう。そのために、クロニスタ (cronista 作者) は色々な技法を駆使するが、なかでも多く見られ、そして好まれるのがユーモアと風刺である。

ブラジルのクロニカに関しては、長い間に書き貯められた作品が大体の場合作者自身によって編纂され、アンソロジーとなり、ブラジル文学の中で注目されるべき場所を占めることになる。文学作品と見なすべきなのか、単なるエッセイと見なされるのか、重要なのは、文学作品本来の普遍性を帯びているのか否かということなのである。

クロニカ (crônica) とは何か?

クロニカとは、日本語ではさしずめエッセイまたは随筆に相当するものであろう。しかしその定義は、ブラジル文学の枠内でみると、単なるエッセイではなくなり、一つのれっきとしたジャンル - クロニズム (cronismo) - として、その存在を主張するのである。ともすれば、新聞や雑誌に掲載される文芸欄 (folhetim) に過ぎず、時の経過とともに色褪せ忘れ去られてしまう小品にもなりかねないが、それがどのようなプロセスで、文学作品に不可欠な普遍性を帯び、一ジャンルを確立するに至ったのであろうか。

私自身、クロニカについて調べるうちに、その奥の深さに驚かされ、そしてまた強く魅了されてしまっているのである。「灯台下暗し」とはよく言ったもので、あまりにも身近な存在であるが故に、見落としていたことを思い知らされた次第である。

crônica をポルトガル語・日本語辞典等で引いてみると、大体最初に出てくる定義が、年代記、編成史とあり、それは英語やフランス語の同根語 chronicle や chronique にも残されている。ところが、ポルトガル語では説明項目の3番目くらいに、(新聞の)時事評欄、コラム、そして随筆、エッセイとある。確かに新聞の時評とは関係が深いのだが、ブラジル文学におけるクロニカとは、これだけではもちろん理解できない。

クロニカ、またはクロニスタ (クロニカの作者) という言葉は、『ラテンアメリカを知る辞典』(3) や『スペイン・ポルトガルを知る事典』(4) では、16、17世紀に書かれた年代記、それらの作者・编者または歴史家をクロニスタというところまであるだけである。日本におけるポルトガル語やブラジル文学関連の書で、本編で言及するクロニカが紹介されたものに、『ルーベン・ブラガ (Rubem Braga) の15のクロニカ』(5) がある。そのはしがきの短い定義によると、「crônica とは主として新聞、雑誌などのために特定のテーマで定期的に執筆したもの、あるいはそのための欄 (コラム) のことで、扱われている内容によって crônica literária (文学的クロニカ, crônica política (政治的クロニカ) などと呼ばれる。」とある。この時点では、まだ「クロニカ」と片仮名書きになっていなかった。また最近出版された『ブラジル文学事典』(6) にも、「評論」という訳になっていた。し

4 エレナ・トイダ

しかし、これだけではクロニカという小作品がどんなもので、なぜ文学のジャンルになり得るのか理解できない。ブラジルで出版された書物以外で、非常にわかりやすい簡潔な定義をしているのが、アーヴィン・スターン (Irwin Stern) (7) のブラジル文学事典ではないかと思われる。見出し語は既にポルトガル語 CRÔNICA をそのまま使用している。

crônica の英語の直訳が chronic^{1e} であるにもかかわらず、19世紀後半からこの言葉は、歴史的であれ、個人的であれ、想像的であれ、生活の「スケッチ」を語るものとして使われてきた。(略) 大体そのテーマと内容は、軽い抒情的なものから辛口の皮肉っぽいもの、はてはブラック・ユーモアに至る、文体は非常に口語的である、長さは大体1000字以下である。

ところで、クロニカという言葉の語源を調べてみると、興味深い発見があった。

クロニカという語はギリシア語の krónos (時) とラテン語 annu (年) で形成されている複合語だが、「クロノス」を調べてみると、

「現実」、叙事的時間、毎日にくり返される継起的、日常的な時間、「生活」の時間、「現実」の時間

とある。しかし、ポルトガル語においてクロニカという言葉は、この定義の最初の方にある通り、確かに「年代記」(8) のことなのだが、もう一つの意味は、「生活」や「現実」の時間を題材にして創作する小作品ではないかと考えられる。

ブラジル文芸批評家で最も著名なアントニオ・カンディド (Antonio Candido) が「読書を好きになるために」(Para gostar de ler) シリーズのクロニカ特集号で書いた序文で、このジャンルについて論じているが、非常に的確なおかつ見事なのでここに紹介したい。

まず注目すべきがその序文のタイトル A vida ao rés-do-chão だ。「地階での生活」とでも訳するのが適当であろうが、この rés-do-chão の意味が、地階ともう一つ、フランス語の rez-de-chaussée つまり、娯楽のために新聞

の片隅に設けられたスペースというものである。従って、新聞や雑誌の片隅で息づくクロニカは、地上で息づく庶民そのもの、日常生活を描写するということを前提にしているのだと明示しているのだ。

クロニカは「メジャーなジャンル」ではない。文学が偉大なる小説家、戯曲家や詩人たちで形成されるように、いくら優れていたとしても、偉大なクロニスタ達によって形成されるとは想像もできないだろう。またノーベル賞をクロニスタに授与するとは考えもしないであろう。従って、クロニカとはやはりマイナーなジャンルであるようだ。

「ありがたいことに」—そう言いたい。なぜなら、マイナーであれば、クロニカは我々の身近に留まるからだ。そして多くの人には、人生への道標だけでなく、文学への道標にもなるからだ。一見自由そうなテーマや文体、まるで不要なものであるかのような雰囲気をもちながら、日々の感性にフィットする。特に我々のいちばん自然な在り方に近い文体を、入念に創り上げるからだ。

つまり、クロニカはその謙虚さのなかで、より読者に接近し、作品の深さと洗練された、しかしシンプルなフォルムをもって、「予期せぬうちに控えめながらも完全なるものへの候補となるのだ。」とカンデイドは言っている。

偉大な文学作品は数えきれないほどある。もちろんそれらが文学作品として地位を確立した背景には、読者の人生観、世界観までをも変えてしまうほどの力、感動させる力があったからにほかならない。ただ、強いていえば、そこで扱われているテーマの偉大さ、言葉使いの壮麗さが、とすれば、

現実の、真実の偽装として機能してしまうことだ。文学はたびたびその危険を冒す。その結果として読者に物事を公平にみる力を妨げるのだ。その点、クロニカはいつも物や人の原寸を確立し、回復する手助けをしている。形容詞の飛来や白熱した文章からなる崇高なシーンを提供するよりも、些細なことに推察しかねる大

きさ、美しさ、あるいは希有さを表現するのだ。よりストレートなフォームで、真実と詩の味方となり、特にユーモアを駆使して、すばらしい作品となる。それは、全てが一瞬にして過ぎ去る、新聞の、そして機械の時代の申し子であり、長く存在し続けようと主張しないからである。

新聞の時評欄がその誕生した場所であるとすれば、もとよりクロニカは本になるために書かれたものではない。今日買って、明日は掃除にでも使われる運命の儚い出版物の一角に、読者を楽しませるために書かれたものである。これを覚悟で書いているクロニスタは、もちろん後世にまで自分の作品を残そうとか、賛美されようとは夢にも思っていない。カンディドはまたクロニスタのあるべき姿勢を、高い山の上から書くのではなく、簡素な地上階から書くのだと定義した。だからこそ、クロニカを文学と意識せず、一人一人の生活に溶け込ませ、新しい存在に変化させることができるのだ、といいきる。

その危ういともいえる存在のなかで、クロニカはしかし、強力な耐久性をみせるときがる。それはアンソロジーが編まれ、本として出版されるときである。おそらくは「クロニカ自身」が意識していたよりも、はるかに深い意味と普遍性をもって。

「福音の教えにあるように、救おうとするものは失われ、失うことを恐れぬものは救われるということであろう。」(カンディド)まさにその通りだ。つまり、読者に気にいられようとか、文学にふさわしいテーマにしようとか、あまり考えずに、クロニスタは自分の視点をとても大切にす。等身大の隣人を、無邪気な子供を、貧しい家族の風景を、自然の木々や花々を、いとおしく、または意地悪く、そして読者が最も楽しめる、風刺たっぷりに描くのである。作品を通して何かを教えようとは考えていない。軽く読みやすいものであるからこそ、難しそうな哲学的書物より、読者に伝わるものがあるのだ。

また、作品の長さに関し、短編小説、いわゆるショート・ストーリー(またはコント)とクロニカとの相違点にふれねばならない。(和訳すると、conto は短編小説であり、用語として crônica との違いは明白なのだが。)どちらも散文のジャンルであり、極めて近い存在と言えるが、両者の違い

は作品の密度の濃さにみられる。

短編を書く作家は、登場人物、時間、空間、雰囲気、そして語り手の視点までも、綿密に構想を練り設定する。つまり、長短の問題を除けば、小説家が長編を書くのと変わらない。しかし、クロニスタはもっと自由にふるまい、状況を大切にすのだ。

クロニカの語り手はクロニスタ自身である。つまり、語り手とクロニスタは、一人称であれ、2、3人称であれ、一体になり直接読者に語りかける。選んだ題材を、実際にそこに存在するかのように「再現」して語る。だからクロニカを読むと、目の前のスクリーンに、その情景が次から次へと浮かび上がるのだ。新聞の申し子であるという特徴がここに見られる。

また、このレポート形式の特徴は、女流詩人のセシリア・メイレーレス(9)(Cecilia Meireles)のクロニカを例にとってみると興味深いものがある。メイレーレスは象徴主義の強い影響を受けた詩人で、もちろん本業は詩であるのだが、60年代にラジオでクロニカを発表していたこともある。その時期、抒情的な「レポート」(ほとんど散文詩に近い)をいくつも創作しているのだが、その中に「もし私が絵描きだったら」(*Se eu fosse pintor*)という作品がある。一段落ごとの風景を透明なフィルムに描くように語り、それらを次々に重ね合わせていく。その語りを追っていくと、読者は完全な風景を頭の中で作り上げていけるのである。見事なりポートと詩が一体化した作品だと思われるが、読者をリスナーに置き換えても同じことが可能であろう。

本項を閉めるにあたり、コウチニョ(Coutinho)(10)の言葉を引用しておこう。

クロニカとは、その本質において、強い抒情性をもつ一つの芸術、言葉の芸術である。非常に私的で、人生のスペクタクル、物事、生きとし生けるものを前にして起こる個人的な、そして本質的なりアクションなのである。

クロニカが辿った道

最初のクロニスタが誰であったかに関しては、一説によると、1500年ま

で遡らなければならないようだ。すなわち、ブラジルが「発見」された時までである。ペロ・ヴァス・デ・カミニャ (Pero Vaz de Caminha) が、マヌエル王へ送った手紙は、実はクロニカの誕生を意味するのだと言われているからである。この出来事がブラジル文学の起点になるかどうかは、もちろん疑問だが、事実として、カミニャの手紙は、クロニスタの創作であるということだ。彼は初めて接するインディオ達とその生活様式など、いわゆる状況について細かく、時にはとるに足らぬ事でさえ、「レポート」しているのである。ここで、カミニャは、クロニカの基本原則 - 状況を記録する - を打ち出したのである。

「年代記」としてのクロニカは、現在ではほとんど見られない。しかし、19世紀後半以降書かれ始め20世紀にルーベン・ブラガが完成させた一文学形式に、語源の別の意味 - 「生活」、「現実」の時間 - に焦点をあて、クロニカという名称が与えられ定着したのである。このかつては文学史に重要な位置を占めた「クロニカ」は、新しいジャンルとして生まれ変わり、ブラジル文学において確固たる位置を認められたのである。

16世紀から20世紀初頭まで、ずっとブラジルの文壇をリードしてきたのは、実はポルトガルであり、ヨーロッパ文学の流れであった。しかし、ブラジル文学は常に文学を『ブラジル化』することを模索してきた。ポルトガルから独立する19世紀初頭の頃から特にそうした傾向が強くなる。

1773年にカミニャの手紙が発見されてから今日までの月日を見ると、クロニカの歴史は随分長くなってしまおうにも思えるが、これがクロニカの第一歩だったとすると、次のステップはジョゼー・デ・アレンカール (José de Alencar) の登場である。

1854年から1855年にかけて、『商業新聞』(*Correio Mercantil*) に「ペンの赴くままに」(*Ao correr da pena*) と題して、アレンカールは当時の首都リオ・デ・ジャネイロのベル・エポックを題材にし、クロニカを連載した。

彼が書くものが「クロニカ」と命名されるまでは、その日の、政治、社会、芸術、文学などを題材とする新聞の文芸欄、または新聞の下部に載る囲み記事のようなもので主にフォリエチン (folhetim) と呼ばれていた。この文芸欄は少しづつ時を経るにつれて、短くなり、読者により身近なものに変わり、今の形になったといえるであろう。その過程の中でますます

読者を楽しませるということに重点をおき、クロニカは論理的または批判的な側面を切り捨て、抒情の世界にも足を踏み入れることになるのである。

19世紀後半、写実主義の最高峰ともいわれるマシャード・デ・アシス (Machado de Assis) の活躍がみられる。この時代においては、彼より他にこのジャンルを発展させたものはいないであろう。若い頃から晩年までずっとクロニカを書き続け、文芸欄執筆者の手法を「軽薄さと有益の素晴らしい融合」と定義した。風刺に満ちた視点と世の中の悲喜劇を描写する彼の腕は、クロニカを通して洗練されたともいわれる。

20世紀初頭にかけて、マシャードのように、多数の小説家たちが新聞に匿名記事を書いたり、自分のコラムを執筆したりして、生活の糧にした。中にはブラジル文壇を代表する著名な作家たちもいた。たとえば、高踏主義の代表的な詩人、オラヴォ・ピラッキ (Oliveira Bilac) である。彼の作品には、少しずつブラジル独特のものになりつつあったクロニカがみられる。また女性作家に対する偏見に打ち勝ち、称賛されるべき地位を獲得したジュリア・ロペス・デ・アルメイダ (Julia Lopes de Almeida) の活躍もみられた。

特筆すべきはジョアン・ド・リオ (João do Rio) であろう。前近代主義のさなか、都市改革が進み、世俗主義がわきあがる当時のリオの街の生き生きとした、ドラマチックな側面をクロニカに記し続けたのである。

近代主義の起点とされる“近代芸術週間”が開催された1922年から翌年にかけて、その理念を弁護する目的で、メノッチ・デル・ピッキア (Menotti del Picchia) が「パウリスターノ新聞」(*Correio Paulistano*) にクロニカを執筆した。

そして1936年、クロニカの最高峰といえるルーベン・ブラガの初めてのクロニカ集『男爵と小鳥』(*O Conde e o Passarinho*) が出版される。彼のクロニカの完成度の高さから、文壇はその価値を認め、唯一クロニスタとしての業績のみで、ブラジル文学史にその名を連ねることになった作家である。その後クロニカを書く作家は大勢現れるのだが、大体詩人または小説家としても活動しているものが多い。

ブラガはミナス・ジェライス州都ペロ・オリゾンテの「午後日報」(*Diário da Tarde*) という新聞社でレポーター兼クロニスタとしてその活

動を開始した。1944年には、イタリアへの遠征軍に従軍し、そこで多数の戦争クロニカを書き、1945年その選集も出版した。帰国後、すでにクロニスタとして有名になっていた彼は、ますます執筆に専念することになる。

ブラガのブラジル文壇における最大の貢献は、ブラジルのクロニカを革新したことにある。他愛のない出来事の意義を見出すことにかけては、まさに天才としかいえないだろう。シンプルで的確な文章、そして抒情的で静かで暖かい視点と風刺 - それらがすべて融合され、読者は彼のクロニカの中に過ぎていく一瞬一瞬をいとおしむ語り手 = クロニスタを発見する。日常の取るに足らぬ小さな事が評価され、そこにこそ大切にすべきことが存在するのだということを、読者は教えられるのだ。

続いてブラガの一選集のタイトルにもなっている、無数の作品の中でも名作とされる「一株のとうもろこし」(*Um pé de milho*, 1945年発表)を紹介したい。初版のはしがきで、著者自身が各クロニカの初出について述べているのだが、著者の性格がそのままクロニカの性質と重なるような結びが面白い。

正確にどこに発表されたかについては詳しく述べない。それは意味のないデテールであり、そんなことで読者を疲れさせないためだ。

さて作品だが、4段落のわずか400語あまりのクロニカである。

アメリカ人達が、レーダーを使って月とコンタクトをとった。それはそれで、感動せざるを得ないことなのだ。しかし、今週のもっとも重要な出来事は、私の一株のとうもろこしの上に起こった。

第一段落でアメリカ人と月のコンタクトは、「私」ととうもろこしの間に、それも「今週」起こった大変な出来事と同じレベルのものとして登場する。それは、庭師が手入れの際持ってきた土の中から芽吹いた何か雑草らしきものの発見から始まる。

第二段落で、「しかし、それはとうもろこしであることがわかったのだ。」

と断言するが、その根拠は書かれていない。「なぜわかったのだろうか?」と考えさせられる。そして、「小さい葉っぱが枯れ、死んでしまう」かとも気をもんだが、「彼はよみがえった」。友人には雑草だ、さとうきびだ、とからかわれながらも、花壇に植えかえ大事に育てる。

私は無学で、哀れな町の男だ。しかし、私の思ったとおりであった。それは成長し、2メートルの高さになり、葉を塀の外に伸ばしている、輝かしい一本のとうもろこしなのである。読者の方々は、一株のとうもろこしを見たことがありだろうか。私はなかった。たくさんとうもろこし畑を見たことはあったが、全然違うのだ。

第三段落では、「私」の身の上について簡単に述べる。町の片隅にひっそりと暮らす一市民である「私」に、読者は共感を覚えはじめ、またクロニカの中にも引き込まれていく。読者に語りかけながら、「窮屈そうに立つ」一株のとうもろこしはとうもろこし畑や農地の中のものではない、自分の、一個人のものであると強調する。

それは生き物で、自立しているのだ。紫色の根は地面にしがみついており、長くて青々とした葉は不動でいることはない。私はシュールな(超現実主義的)比較は大膽いだ。しかし、その成長の栄光のさなか、月明かりの夜に私が見たその姿は、毅然と風にたてがみをなびかせる馬のようだった。またある夜明けには雄鶏が鳴いているようだった。

とうもろこしは自立した生きものとして位置付けられる。また月明かりの夜や夜明けに見る馬や雄鶏との比較は、どこかお伽話のようでもある。

最終段落では、その出来事が明らかになる。「思いがけなく私を魅了した」こと、それは「私の」とうもろこしに雄穂がついたことだったのだ。

世界には美しい花がたくさんあり、とうもろこしの花が一番美しいわけではないだろう。だが、それらのしっかりした、垂直な、

潮風にキスされているとうもろこしの穂は、心地よい力と喜びをもって、ありふれた我々の花壇を豊かにしたのだ。猛然と確かに主張する、生きていく何かなのだ。私の一株のとうもろこしは大地の美しい贈り物なのだ。そして、私はもうつまらないタイプライターの後ろで生きる一人の平凡な男ではなく、ジュリオ・デ・カスチーリヨ通りの裕福な農夫なのだ。

ここでは、ブラガ独特の抒情的表現とこまやかな描写が冴えるのだが、たった一株の他愛もないとうもろこしが、なぜ「私」を魅了し、無学で哀れな平凡な男を裕福な農夫に一変させるのであろうか。その至福の時が長く続かないにしても、「私」はその時だけは至福を味わえるのだ。このクロニカのメッセージは、人はささやかな事で心が一変するということであろう。アメリカ人が月とコンタクトをとってニュースになることと同じくらい「私」ととうもろこしの出逢いは重要なできごとであったのだ。ありふれたテーマではあるが、読み終えた読者は、いつのまにか「私」に自分を投影し、そうだと通りだと肯定しているであろう。改めて些細な事でもものでも一瞬の幸せを与えてくれるのだと気付かされる。日々の喧騒に麻痺させられてしまった感性を呼び戻すこともできるかも知れない。これを読むのにたいして時間はかからない。その何分かの間に読者を感動させ、うなずかせられたら、文学の本来の役割 - 教え、感動させ、楽しませ、そして最終的には浄化する - は果たされていると思われる。

おわりに

クロニカとはブラジルのものを渴望する文壇の要求にこたえ、誕生したものであろう。実質的には19世紀後半から書き始められたクロニカは、当時の社会を面白く描写する目的で現れた文芸欄が洗練され、ブラジル独特の色を帯び、独立したジャンルにまで成長したものだといえる。唯一純粋にブラジルのといえるジャンルがクロニカである。(クロニズムとも言われるが、一般的には「クロニカ」が定着している。)クロニカがブラジル独特のものであるということは、そこで使われるポルトガル語もポルトガルのそれとは異なるということでもある。当然ながら、クロニカが日

常生活に密接しているということは、常に口語的でインフォーマルな表現を多用するわけである。従って、事実クロナスタの中には、ポルトガルの言葉に翻訳されなければならないものが存在するのである。

思うにクロナカは伝統的な文学の要素を維持しつつ、難しい梗概等を超越して、読者に親近感をもたせ、素直な感動を呼び起こすものだ。短編であるからといって、価値がないわけではない。むしろ、短い文章のなかに感動の要素をどう盛り込むかのクロナスタのテクニックがみものなのである。

新聞の申し子であるが故に、語り手=レポーター=クロナスタとなり、語り手が一人称である場合が多い。しかし、別にそのテーマが作者の実体験に必ずよるものではない。いかにも見ていたかのように、クロナスタのフィルターを通して語られるといった方がよいと思われる。新聞という最も大衆の身近にある媒体を通して発表されるクロナカは、まず大衆に語りかける。それ故テーマが日常茶飯事の、読者の身近に転がっているものが多い。いわゆる純文学からみれば、到底ふさわしくないものばかりであろう。

文学の役割が「教え、感動させ、楽しませ」、最終的には「浄化」せしむることだとすると、クロナカはどのようにその役割をこなしているのか。この人生の儂い時間、指の聞からこぼれおちる一瞬を大切にすることを、シンプルな、でも的確な言葉を使って、わかりやすく教えてくれる。仕事から解放され、我が家にたどりつき、新聞や雑誌の隅に何気なく載っているクロナカにさっと目を通す。そこで読者にほっと一息つかせられたら、あるいは笑わせられたら、そこでクロナカ本来の役目が果たされているのではないと思われる。

唐突に響くかもしれないが、私はクロナカと俳句の間に少なからぬ類似点を見出さざるを得ない。俳句は大衆の中に浸透し、大勢の人に親しまれている。伝統的な文学でありながら、小学生でもつくれる。庶民の中に題材をもとめ、17文字の中に小宇宙を創り上げるのだ。誕生のプロセスは少々異なるかもしれないが、クロナカに関しても同じ事がいえるのではないだろうか。1000語に限られた、クロナスタのそれぞれの持味でユーモア、アイロニー、リリズムを漂わせている小宇宙だ。また俳句が大衆のそばに生き続けることに関しては、クロナカも同様である。取るに足らぬ些細

な出来事さえも、クロニスタの手にかかれれば、俳句がそうするように、一つの宇宙を形成し、感動を与える文学作品を形成するのである。

ブラジルのハイクイスト、ギリエルメ・デ・アルメイダ (Guilherme de Almeida) (11) が俳句を定義した一句がある。

洗い、水を切り、揺さぶる
砂を。やがて、篩に
残るは一粒の金

クロニカも同じようなプロセスを経て、短ければ400文字足らずの小宇宙を創り上げる。無数の街角に転がっている砂利を篩(ふるい)にかけ、洗い清め、揺さぶる。そして残るのは、一編のクロニカ…。

*ポルトガル語文献およびクロニカ引用は本稿のために独自に翻訳したものである。

注

- (1) 「クロニカ」という言葉は、本稿であつかうテーマの意味では、日本語では知られていない。しかし、あえてタイトルに使ったのは、この言葉および「クロニスタ」(=クロニカ執筆者)を、ブラジル文学のれっきとした一ジャンルのもものとして紹介したいと考えたからである。
- (2) 『現代ポルトガル語辞典』、白水社、1996年。
- (3) 『ラテンアメリカを知る辞典一新訂増補版』、平凡社、1999年。
- (4) 『スペイン・ポルトガルを知る事典』、平凡社、1995年。
- (5) ポルトガル語のテキストのために編まれたもの。
- (6) 田所清克・伊藤奈希砂、『ブラジル文学事典』、彩流社、2000年。
- (7) Stern, Irwin 文献100ページ参照
- (8) 大航海時代には Crónica dos Feitos da Guiné (ギネー年代記) など、数多くの「年代記」が書かれた。
- (9) Cecília Meireles 象徴主義に強く影響され、近代主義のさなかにありながら、独自の詩の世界を創りあげ、多くの読者をもつ女流詩人。
- (10) Afrânio Coutinho 現代の批評家たちに大きな影響を与えたことで知られる文芸批評家。文学作品の構成に重点をおく分析を主張した。ブラジル文学院の一員。

(11)Guilherme de Almeida ブラジルにおける俳句普及運動の中で、アルメイダ流ハイクを確立した。

参考文献

Bosi, Alfredo (org.) , *O conto brasileiro contemporâneo*, São Paulo, Cultrix, 1977.

Braga, Rubem, *Um pé de milho*, 4. ed., Rio de Janeiro, Record, 1982.

Coutinho, Afrânio, *Notas de teoria literária*, Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1976.

Coutinho, Afrânio, *Introdução à literatura no Brasil*, Rio de Janeiro, Bertrand Brasil, 1995.

Meireles, Cecília, *Janela mágica*, São Paulo, Ed. Moderna, 1981.

Moisés, Massaud, *Dicionário de termos literários*, 3.ed., São Paulo, Cultrix, 1982.

Moisés, Massaud, *Pequeno dicionário da literatura brasileira*, 6.ed., São Paulo, Cultrix, 2001.

Sá, Jorge de, *A crônica*, São Paulo, Ática, 2001.

Setor de Filologia da FCRB, , *A crônica*, Campinas:Ed.Unicamp, Rio de Janeiro: Fundação Casa de Rui Barbosa, 1992.

Stern, Irwin, *Dictionary of Brazilian literature*, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1988.

長谷川泉・高橋新太郎(編)『文芸用語の基礎知識』、至文堂、1988年。

池上峯夫『Quinze Crônicas de Rubem Braga (ルーベン・ブラガの15のクロニカ)』、芸林書房、1980年。

